

部活の惑星

普連土学園 理科部 (東京都)

夢をのせて、発射!

1

チョコの筒ロケット、空へ。永遠の30秒

ウィイーーン、ガガッ。

東京タワーを近くに臨む校舎の一室に、武骨な工作音が響きわたる。

「エミリ、今日も早い!」

高1のネオは慌てて理科室に駆け込むと、電動ノコギリを器用に操る同級生に軽く手を振った。制服はすでにベニヤ板の削りカスまみれ。女子力という言葉とはほど遠いキャラだけど、一心不乱に作業するエミリの並外れた集中力は、彼女らのプロジェクトには欠かせないものだったりする。

いつもの場所に座ったネオが取り出したのは発泡スチロール。カッターナイフを取り出して、小さな穴をせっせと作り始めた。すぐ隣では、同じく高1のモモコとリナがヤスリで何かを黙々と削っている。

理科部というよりは、どこかの工務店と言った風情だが、高1女子4人組が取り組むのは、理系の憧れと言ってもいい大プロジェクト——。大型ロケット製作だ。

リケジョ…?

「おお、今回はゴリゴリのリケジョの話か」と思った人、ちょっと違うかも。なにせ主人公のネオは中高一貫の普連土学園に入った頃、理科には全く興味なかったのだ。

入部の理由は、他の部活と違って「あんまり上下関係がなさそうだった」からだし、ロケット班を希望したのも「ロケットって超楽しいよ。一緒にやろーよ」とハイテンションで話しかけてくる先輩に圧倒されたた



め。顧問の松浦良知先生の「ロケット班は大変だよ」という言葉も当時はあまり気にとめなかった。

最高時速180km

彼女らが研究しているのは、厚紙や木材、プラスチックなどで作ったモデルロケットを正確に飛ばす技術。ロケット花火のように、推進薬(火薬)を燃焼して生じたガスを後方に噴射し、その反作用で上空に飛ばす仕組みだ。

火薬を扱う上、小型の模型ロケットでも最大速度は時速180kmに達することもあり、打ち上げには日本モデルロケット協会が認定するライセンスの取得が求められる。このため、ロケット班のメンバーが最初に経験する打ち上げは必然的に、小型ロケットを飛ばす、最も簡単な4

級ライセンスを取得するとき、ということになる。

ネオは中1の夏休み、ライセンス取得の打ち上げに臨んだ。先生や先輩に言われるままに、マープルチョコの筒をカッターで加工する。空気抵抗を減らすため、先端に木材をヤスリで削った円すい形の「ノーズコーン」、内部にはパラシュートを装着。軌道を整える尾翼(フィン)を胴体につけ、火薬が装填された専用のエンジンを筒の中にセットし……。

「よし、完成!」

見よう見まねで約2か月かけて作り上げた小型ロケット。エミリらが打ち上げに成功したのに続き、ネオは火薬に点火するコントロールボタンを「えいっ!」と押した。

シュー——。

鋭い音と共に発射台から飛び出した小型ロケットは、空を突

き刺すようにぐんぐん上昇。秋空のど真ん中でパッとパラシュートを開いた。

「お菓子の筒が、飛んだ……!」初の打ち上げは、製作期間2か月にして、滞空時間はわずか30秒。だけど、空飛ぶマープルチョコの真つすぐな軌道はネオにとって、一生忘れられない特別なものとなった。

理科部に新たな歴史を刻むことになる「ロケット女子、誕生の瞬間だった。

